

福岡城「枅形門」に関する考察

濱野 貴司
宮崎 克則

1 はじめに

福岡城は梯郭式平山城と呼ばれる「織豊系城郭」⁽¹⁾の典型的城郭である。梯郭式とは本丸の二方、または三方を他の曲輪が囲んでいる形式であり、平山城とは丘陵に建てられた城を指す。福岡城の築城主である黒田長政(永禄11(西暦1568)年生－元和9(1623)年没)は城及び城下町を敵から守るために、立地条件を生かした縄張をし、堀や土塁等の防御施設を築いた。熊本城の築城主である加藤清正も、自身の城は3～4日で落ちるが福岡城は30～40日は落ちない、とって福岡城を高く評価したという。そのように堅固であった福岡城には城下の他の門はもとより、他城郭の門と比べても規模や形式に大きな特色を持つ「枅形門」と呼ばれる門が存在した。城門は平時・戦時問わず警備や防衛の拠点として極めて重要な役割を果たし、城郭には不可欠の防御施設である。敵に門を破られると落城の可能性が一気に高まるため、築城主は門の設置場所や構造には特に精力を傾けたものと思われる。ところが、福岡城ではこの「枅形門」だけが際立って異彩を放っているのである。では、なぜ「枅形門」のような特異な門がつけられたのだろうか。

本稿では、福岡城「枅形門」についての諸史料を紹介し、また、他城郭の門と比較することによって、「枅形門」設置の理由やその影響等について考察したい。

2 福岡城の概要

(1) 成立

黒田長政は慶長5(1600)年9月15日の関ヶ原の戦いにおいて、徳川家康率いる東軍に属し、石田三成等の西軍を破りこの戦いに勝利した。長政は家康より大いに軍功を認められ、同年10月1日に筑前国15郡、50万2400余石⁽²⁾を与えられた。当時、豊前国中津城主であった長政は転封に伴い、同年12月8日に家臣を遣わして筑前国名島城(福岡市東区名島)を受取り、自らも同月11日に同城に入った。前領主小早川氏が築いた名島城は三方が海に囲まれた要害堅固の城塞であった。だが、長政は入城早々、新城への移転を決意した。貝原益軒(寛永7(1630)年生－正徳4(1714)年没)の『黒田家譜』には、その移転理由を「名島の城ハ(中略)、境地かたよりにて城下狭き故、久しく平らぎを守るの地にあらず」⁽³⁾と記している。長政は父如水(官兵衛孝高)と相談し、住吉・箱崎・荒津山・福崎が新城建設の候補地となった。その中で那珂郡警固村福崎が最も相応しいとして、ここに新城を築くことにした。新城の名称は黒田氏の故地である備前国邑久郡福岡に因み福岡城と名付けられた。

長政は城地決定後速やかに築城開始を指示し、慶長6(1601)年8月より天守台の石垣普請が始まった。一月程で天守台が完成した後は、直ちに本丸石垣普請に移り、さらに本丸作事と並行して二ノ丸、三ノ丸へと外縁部の普請が順次進められた。長政から普請奉行の野口左介一成に宛てた書状で「たとへ如水御このミ相違候とも、前のことくに申し付くべく候」⁽⁴⁾と命じている。長政はたとえ如水の好みと違って

いたとしても、当初の計画のとおりに進めるようにと、父如水の意見を考慮しながらも自らの考えを前面に押し進めての築城であった。そして、「本城端城およそ七年の内にことごとく成就せり」⁽⁵⁾と貝原益軒が記しているように、慶長12(1607)年の秋から冬頃にかけて竣工したものと思われる。

(2) 構造

近世城郭の構造を大きく二分すると、内郭と外郭で構成される。一般的に、内郭とは本丸・二ノ丸・三ノ丸・西ノ丸等からなる城郭の主要部であり、城主の居宅や政庁、軍事施設等が置かれた。外郭は内郭の周辺部であり、主に武士の屋敷地や町人地、寺社地等からなっていた。さらに、^{そうがまえ}総構という語も存在する。小和田哲男氏は総構について、「惣構や総曲輪等ともいい、城や城下町を土塁や石垣、堀で囲んだ外郭のこと、または外郭で囲まれたそれら内部を指す」⁽⁶⁾と説明している。西ヶ谷恭弘氏は、「家臣団屋敷街を三ノ丸外側に形成しすっぽりと外濠で囲む城郭、または家臣団屋敷地の他、町屋・職人街・下級武士街・寺社街までも囲む構造を総構という」⁽⁷⁾と述べている。このように、外郭と総構についてはその定義に多少の差異が見られるようである。福岡城にも内郭と外郭が存在するが、その定義や範囲については、こちらも見解に違いが見られる。では、福岡城の城域に関する代表的な解釈を二例見てみよう。

まず、丸山雍成氏が示した見解⁽⁸⁾をまとめると次のとおりとなる。

- 内郭は、内城と外城とからなる。
- 内城は、本丸・二ノ丸・三ノ丸等の諸曲輪、その中の諸施設とこれを囲繞する石垣・土塁、門及び外城とを連絡する橋を含む。
- 外城は、侍・足軽屋敷、町屋敷・寺屋敷等からなる城下町福岡を包含する曲輪であり、その範囲を、東西は那珂川の中島橋口枡形(東取入)から唐人町口の黒門(西取入)までで、北は博多湾、南は内城の外側、丘陵谷地一帯と見なすべきである。
- 外郭は、内郭を除いた、河海・堀や土塁等で囲繞

される外輪部の区域である。福岡城の総構は、前述の内郭(内城・外城)に加うる外郭全体を指す広義の城域で、それは東限を御笠川の石堂口門とする、主に商人の町博多から、西限を早良(室見)川渡口とする侍・足軽屋敷を含む農村部が、これに相当する。

一方、西田博氏は以下のような見解⁽⁹⁾を示している。

- 内郭とは外郭を持つ近世城郭において、外郭に対する城郭の主体を指し、本丸、二ノ丸、三ノ丸を含む。
- 外郭とは侍屋敷、町屋、寺屋敷等で構成される城下町を取り囲んだ曲輪で、防御線と郭門によって郭外と分けられる。福岡城の場合、その範囲を那珂川、肥前堀、中堀、内郭、ヤナ堀、そして海に囲まれた部分である。
- 外郭のさらに外側の郭という意味での総郭は、博多部を含む、唐人町西の堀、樋井川、大堀、福岡城内郭南の丘陵地、薬院川、房州堀、石堂川の内側である。

丸山・西田両氏の見解の最も大きな相違点は、総構(総郭)の西限が早良川か、あるいは樋井川かという点である。このように、研究者によって意見が割れている要因は、貝原益軒が『筑前国続風土記』で「郭の東は那珂川をかぎり、(中略)唐人町の東の^{ほり}隍を以て内郭とせり」⁽¹⁰⁾としながらも、外郭について明確な東限の石堂口門及び博多の記述を欠き、他方、「城の西は、早良河を以て、外郭とし」⁽¹¹⁾しているからである。

西田氏が早良川(室見川)西限論に異を唱えているのは、早良川に人工の防御線が認められていないことや江戸期から明治初期にかけての多くの史料で貝原益軒の定義を否定しているからである。実際に、樋井川は福岡築城前は大堀(当時は入海であった)に流れ込んでいたのを現在の流路に変えたため、この樋井川を人工の防御線と考えることができる。

正保3(1646)年に作製された『福博惣絵図』(以下、『正保図』と記す)は福岡藩が幕府に提出した公用図(『正保の城絵図』)の控図であり、現存する福岡城下

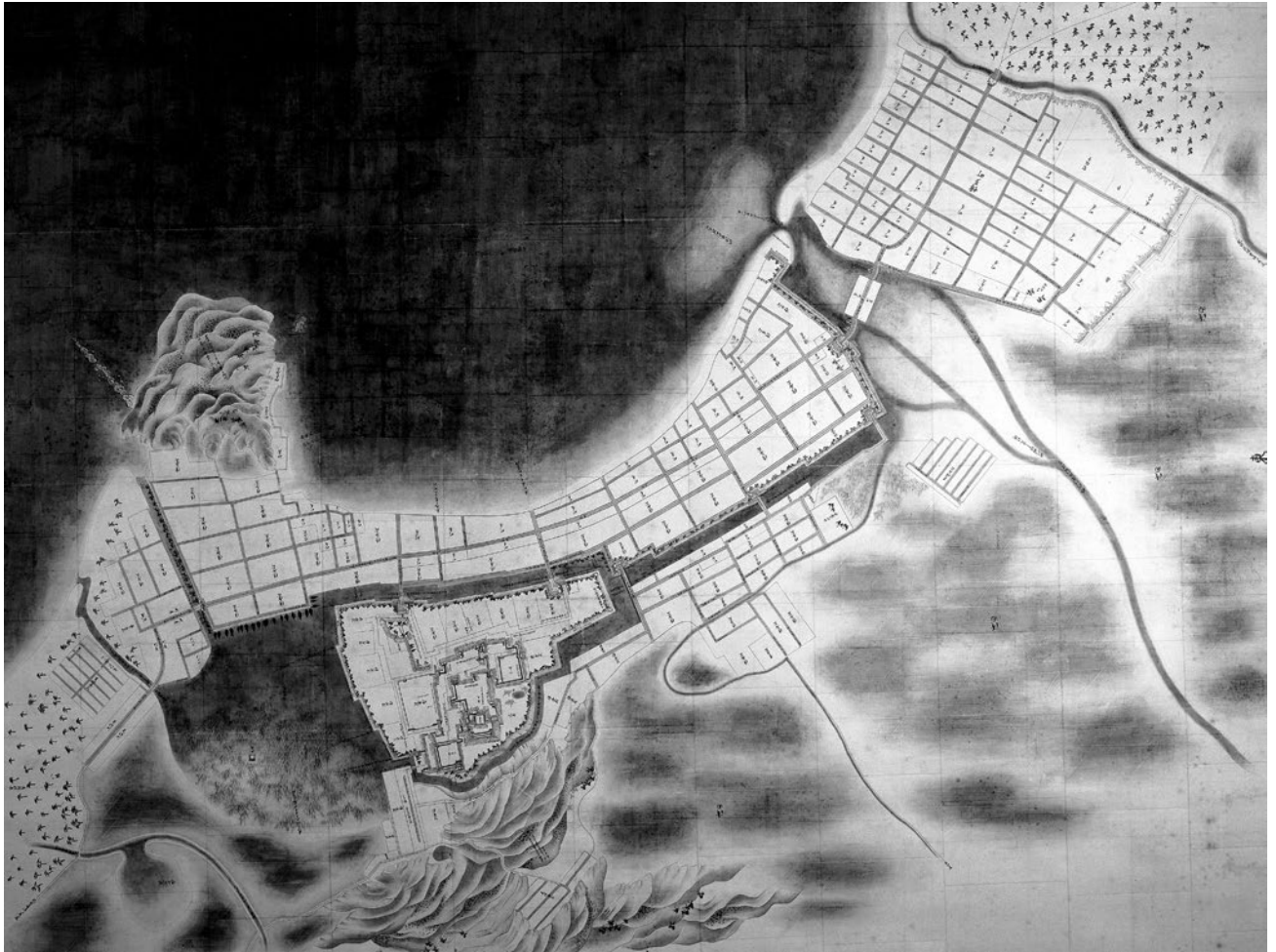


図1「(正保)福博惣絵図」全体図(黒田家資料、福岡市博物館所蔵)

の絵図の中でも極めて重要な絵図である。【図1】この図に描かれた西限は樋井川付近である。さらに、福岡藩が福岡城御門法で規定した城門の分布範囲は西田氏の主張する城域とほぼ一致している。これらのことは、当時の福岡藩の城域についての認識は西田氏の見解と同一であったことを示している。

なお、早良川を外郭とする益軒の見解と福岡藩の認識に違いがあることについて、小林茂氏は『続風土記』が書かれた元禄期までの福岡市街地の西への発展を意識したものであろう、と説明している。⁽¹²⁾

(3) 城門の数

福岡城の城門は、内郭と外郭を合わせて十数カ所という見解が一般的である。実際には、例えば二代藩主忠之以降、三ノ丸西部に御殿が建設され門が新設される等、江戸期を通じて城門の数はその都度増減している。⁽¹³⁾

内郭と外部を結ぶ門は、大手門である上之橋御門と下之橋御門、搦手門(背面の門)である追廻御門の3カ所である。

外郭から郭外に通じる門は、西取入門(通称「黒門」)・赤坂門・薬院門・春吉門、そして東取入門(通称「枅形門」)がある。【図2】これらの門の形態は、



図2 福岡・博多の門(「(正保)福博惣絵図」、福岡市博物館所蔵)

「黒門」のみが平入りであり、他の門は全て枡形虎口である。枡形虎口とは枡形門ともいい、城の虎口(門)に用いられる構造で、2門一組で構成されることが多い。最初の門(一の門)をくぐると周囲に石垣と壁が張り巡らされた方形の空間があり、さらに右手に二の門を築いて、城の内部(または次の曲輪)への侵入を阻む仕組みになっている。この一の門と二の門の間の中庭部分が、枡の形をしていることから名づけられた。なお上記に限らず、一の門あるいは二の門のいずれかが欠けている場合もあり、福岡城外郭の枡形虎口は、全て一の門を有さない。

本稿では、福岡城東取入門の通称、固有名詞の「枡形門」は鉤括弧付きで、枡形虎口の別称である枡形門は鉤括弧無し、または枡形虎口と表記して区別している。

他にも、総構の東端に位置する門として、石堂口門と辻堂口門があった。また、これらに加えて、幕末の史料には今川橋口門の名称が見える。⁽¹⁴⁾

3 「枡形門」について

(1) 概要

「枡形門」は福岡城外郭の門の一つであり、外郭東側にあたる那珂川に面した場所(現在の福岡市中央区天神一丁目の昭和通り(市道博多姪浜線)と県道554号線の交差点付近)に設けられた。この門は唐津街道沿いの、福岡(天神町・橋口町)と博多(中島町)を結ぶ西中島橋の西詰に置かれ、福岡・博多両市中



図3 現在の西中島橋より「枡形門」跡方面を望む
(左の建物が赤煉瓦文化館)

を繋ぐ役割を担う門であった。門があったと推定されている場所には、現在赤煉瓦文化館(福岡市文学館)が建っている。【図3】また、西中島橋西詰には福岡市道路元標が埋め込まれており、同市の道路の起終点となっている。

(2) 名称

前述のとおり、この枡形門とは元来一般名詞であり、枡形の虎口を持つ門を全て枡形門と呼ぶことができる。福岡城の場合は前項に示した門を「枡形門」と呼称することが多い。この門は諸史料では以下のようにさまざまな名称で登場する⁽¹⁵⁾が、本稿では“「枡形門」”と表記を限定する。

博多口門・博多口之門・博多橋口・博多門
中嶋取入・中嶋橋口御門・中嶋橋口
橋口大門・橋口北御門・橋口南御門・橋口取入・
橋口門
東取入
枡形門・升形口

(3) 規模

『正保図』に記載された「枡形門」枡形の寸法は、東西13間(約24メートル)、南北12間(約22メートル)となっている。これは枡形の標準と言われる「五八の枡形」(5間×8間)を上回る「大枡形」という分類に入る。なお、『正保図』に記されている門の寸法は次のとおりである。

「枡形門」	東西13間、南北12間
	矢倉跡の下 石垣高2間4尺
春吉門	北 長8間
	東 長4間 高2間半
	西 長11間 高2間半
薬院門	北 長9間
	東 長7間
	西 長7間 高2間半
赤坂門	北 長9間
	東 長7間
	西 石垣長7間 高2間半

以上は福岡城外郭の門のうち「黒門」を除いた4門

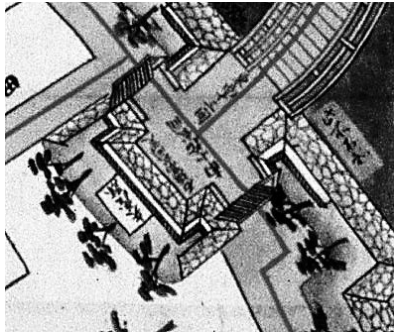


図4「枅形門」

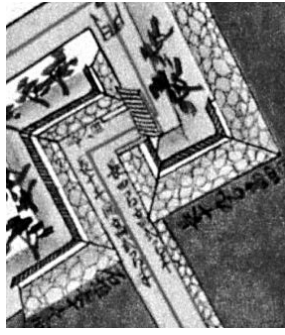


図5 春吉門

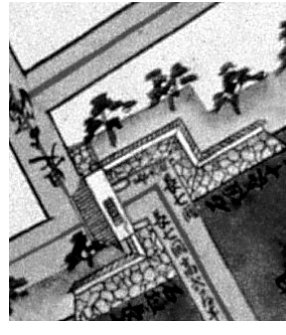


図6 薬院門

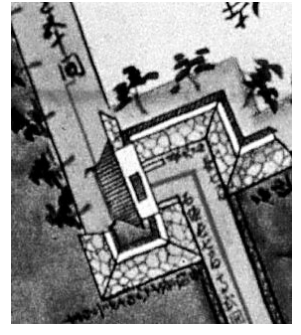


図7 赤坂門

図4～7は「(正保)福博物絵図」部分(福岡市博物館所蔵)

である。『正保図』には「黒門」の寸法は記されていない。

「枅形門」枅形の寸法は東西13間×南北12間であり、次いで門正面の矢蔵(櫓)跡の石垣の高さが2間4尺(約4.8メートル)となっている。ところが、春吉門・薬院門・赤坂門については、枅形の寸法は記されておらず、門付属の石垣の長さや高さのみが記されている。3門とも石垣の高さは2間半(約4.5メートル)であり、長さも東西北を合計するといずれも23間(約41.4メートル)となっている。したがって、「枅形門」以外の3門はほぼ同規模ということになる。

次に、『正保図』に描かれた上記の4門を同縮尺で並べると、図4～図7のようになる。

このように、絵図中に描かれた門を比較すると、「枅形門」の規模が他の3門を上回っていることが一目で理解できる。また、形状も「枅形門」だけが異質であることがわかる。

さらに「枅形門」には、那珂川沿いの北は博多湾、南は春吉門付近まで、およそ700メートル以上にわたって高さ4間(約8メートル)もの石壁が付設されていた。この大枅形と高い石壁が「枅形門」の一つ目の特徴である。

本項の最後に「黒門」について付言しておきたい。「黒門」の規模は史料が乏しく不明な点が多いが、古写

真を見る限り、枅形を伴わない平入りの門であり防御性も低い。【図8】東の備えを一手に引き受ける「枅形門」の嚴重さに対し、西の備えを担う「黒門」がなぜこのように脆弱につくられたのかということについては、今後の課題としたい。

(4) 外観

前項の『正保図』を見て分かるように、「枅形門」は北門と南門の2つの虎口から成っている。前述の一般的な枅形虎口の構造とは異なり、南北の門が向かい合わせになっており、それぞれ別の通路となっている点が「枅形門」の特徴の第二である。北門に通じる道路は唐津街道となり、西へ向かうと福岡城下町を經由して「黒門」、さらに唐人町方面へ抜ける。一方、南門に通じる道路は大身屋敷が連なる天神町、大名町を經由し、福岡城大手門(上之橋御門・下之橋御門)に到る。



図8 写真「西取入門と黒門橋」(安川巖収集資料840、福岡市博物館所蔵)

さらに設置当初、「枅形門」の正面石垣上には櫓が設置されていたことが文献と絵図に見える。まず、『岡本家文書』⁽¹⁶⁾に残る長政の書状を見てみよう。

因幡上候節、状披見候、

- 一 博多口門式ツ并矢倉出来之由得其意候、川上への事ハ先々無用、下着之砌可申付候
- 一 彼矢倉ニ急ニ鐘をつり候へと、空与ニ申渡へく候
- 一 惣様出来次第、白土急ニ付させ可申候也

三月廿八日

長政 御判

年代が明記されていないが、おそらく築城開始後間もない慶長6、7年頃のものと思われる。「枅形門」(博多口門式ツ)と櫓(矢倉)が完成したという報告を受けた長政が、那珂川沿いの石壁の堀のことは自分が福岡に帰国した後に指示すること、その櫓に鐘を吊り下げよう空与(智福寺の僧)に申し伝えること、さらに、最終的には堀の壁に白土(漆喰か)をつけること、の三点を指示している。このことから、設置当初の「枅形門」は櫓を有しており、さらに櫓には吊り鐘が設けられていたことがわかる。次に『吉田家文書』⁽¹⁷⁾を見てみよう。【図9】

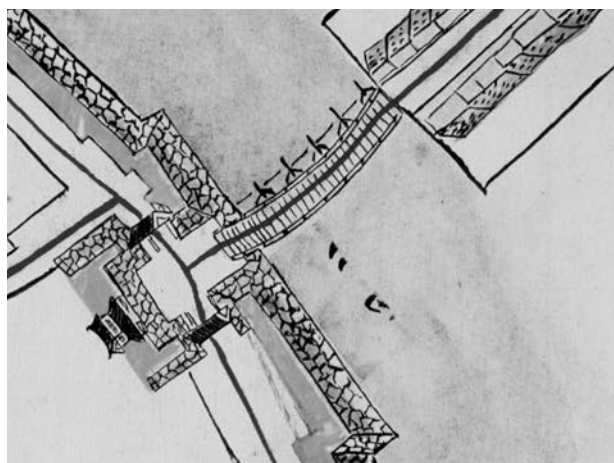


図9 「枅形門」(『福岡城下絵図』部分、『吉田家文書』528、九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門所蔵)

本図は、城下の修築に関する文言が付記されていることから、修築許可申請に関する幕府提出図の控図ではないかと考えられている。作製年代は不明であるが、地図中の地行付近が松林に覆われ金龍寺が描かれていないため、本図の作製は同寺の現在地

への移転、即ち正保4(1647)年から慶安3(1650)年以前と推定されている。

本図の「枅形門」正面には櫓が描かれている。本図の作製年代が、櫓が撤去された寛永期(1624～44)以前のものとは特定することはできないが、前掲の『岡本家文書』の記述とも合致しており、門設置当初は櫓が設けられていたと考えられる。この櫓が「枅形門」の第三の特徴である。

以上のように、①大枅形②二つの独立した虎口③門正面に櫓を持つ城門は、福岡城下はもちろんのこと、日本全国他に類を見ない。

では、門と石壁の様子を絵図や古写真で見てみよう。

ア)絵図

①正保3年『福博惣絵図』(黒田家資料・福岡市博物館所蔵)

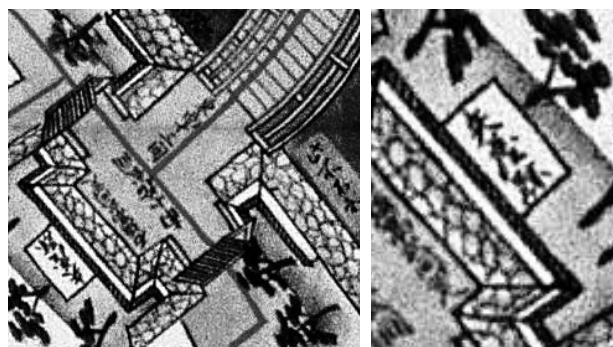


図10「枅形門」(『(正保)福博惣絵図』部分)

図11 拡大図
(『(正保)福博惣絵図』部分)

『正保図』は、正保3(1646)年に幕府に提出された『正保城絵図』の控図である。『正保城絵図』は正保年間に国絵図とともに幕府に提出された城下絵図であり、全国で作製された。現在、『正保城絵図』の多くは国立公文書館に所蔵されているが、福岡城下図は現存しない。本図は、東は石堂川東岸から西は樋井川河口付近まで、北は海岸から南は福岡城の南側に隣接する丘陵までの範囲を収めている。

本図では、「枅形門」の北門・南門はともに櫓を有しない平門となっている。さらに「矢蔵跡」の文字が確認できる。【図11】このことから「枅形門」の特徴の一つであった櫓(矢蔵)は、正保3年の時点には存在していなかったことになる。

②元禄12年『福岡御城下絵図』(福岡県史編纂資料651号・福岡県立図書館所蔵)

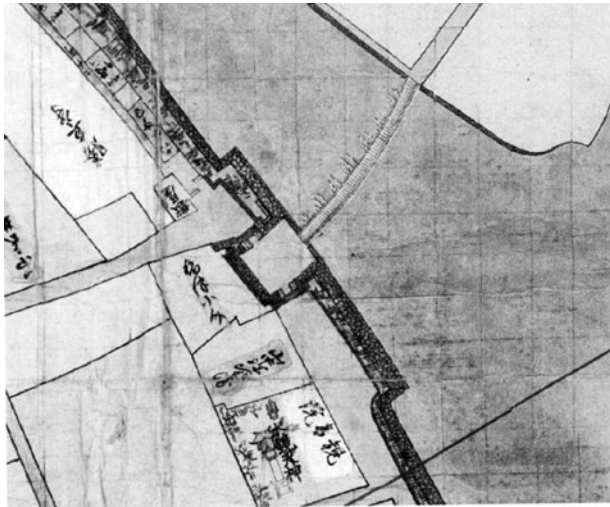


図12 「枅形門」周辺(『福岡御城下絵図』部分、福岡県立図書館所蔵)

本図には年代の記載はないが、明和6(1769)年の『福博惣絵図』の包紙に記載された内容から元禄12(1699)年の作製であるとされている。東は石堂川東岸の崇福寺付近から西は藤崎付近まで、北は荒戸山の沖から南は現在の中央区谷付近までを描いている。

本図でも『正保図』同様、「枅形門」北門・南門はともに平門となっている。『正保図』では広大な侍屋敷となっていた門の後方(西側)は、本図では侍屋敷の南側が水鏡天神(水鏡天満宮)となっている。

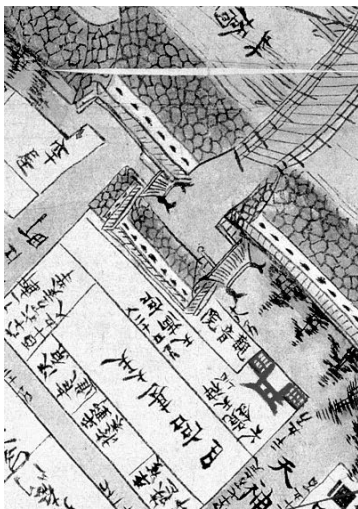


図13「枅形門」周辺(『福岡城下町・博多・近隣古図』部分、九州大学所蔵)

本図は福岡藩の家老であった三奈木黒田家に伝来したもので、文化9(1812)年に作製された。図中の侍屋敷には居住する藩士の名が記される等、19世紀初頭の福岡・博多の様子を克明に描いた貴重な絵図である。

「枅形門」北門・南門が平門として描かれているのは本図も同様である。門の後方の侍屋敷は全て水鏡天神の敷地になっている。また、門の石壁上の長塀が漆喰の白壁であり、前掲の『岡本家文書』の記述と合致する。

イ) 絵画

①『福岡図巻』(黒田家資料・福岡市博物館所蔵)

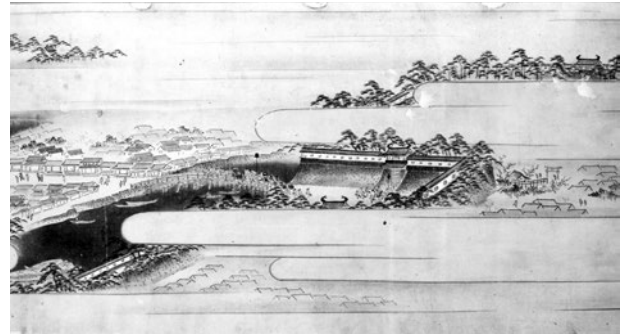


図14「枅形門」周辺(『福岡図巻』三紙目、福岡市博物館所蔵)

『福岡図巻』は、福岡両市中やその周辺の地域の風景を海側から鳥瞰して描いた絵巻物であり、およそ18世紀頃の景観を描いたものと推測される。作者は不明である。

本図中央には、「枅形門」の南門と北門の屋根の一部が見え、どちらも櫓門として描かれている。しかし、本図以外の史料では全て平門となっているため、作者が「枅形門」を誇張して描写したものと思われる。

②『筑前名所図会』(福岡市博物館所蔵)

『筑前名所図会』は博多の文人画家奥村玉蘭(宝暦11(1761)年生-文政11(1828)年没)が文政4(1821)年に著した。博多の醤油醸造業の家に生まれた玉蘭は、

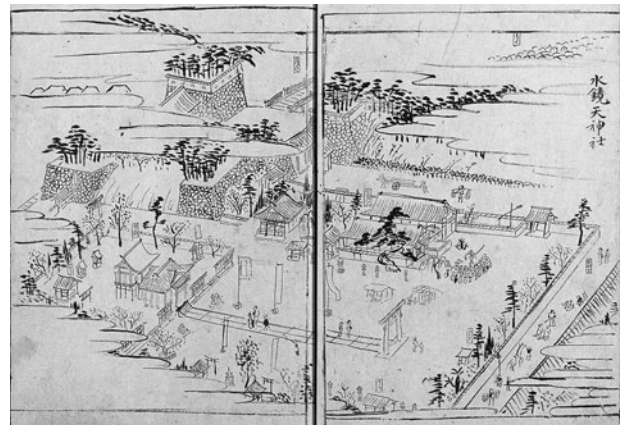


図15 「水鏡天神社」(奥村玉蘭「筑前名所図会」、福岡市博物館所蔵)

独りで筑前国中を歩き回り、名所旧跡ばかりでなく祭りや伝統工芸などをいきいきと描いた。十年余りの歳月をかけて同書全10巻を完成させた。このうち、「水鏡天神」図中左上に「枅形門」の裏手部分が描かれている。これを見ると、先ほどの文化9年の絵図と同様、門後方は全て水鏡天神の敷地となっており、かつて櫓があった場所にも松などの草木が植わっている様子がわかる。

③『博多図並賛』(東光院仏教美術資料・福岡市美術館所蔵)



図16「博多図並賛」(福岡市美術館所蔵)

アに富んだ作風が特徴である。本図は、博多図と題して「枅形門」と西中島橋を描き、次の賛を付している。

博愛の君子固より多し

博物の豪傑も亦た多し

故に云う博多と

豈爰に博奕の小人多からんや

本図は門自体よりも石壁の壮大さが際立った描写となっている。まさに眼前にそびえ立つという形容が最も相応しい。この絵のように、博多部からは福岡城下町の様子を全く見る事ができない。「枅形門」が博多町人の前に巨大な石壁として立ちはだかり、福岡と博多の交流を阻害していた門の実態と

せんがい きほん
仙厓義梵(寛延3(1750)

年生 - 天保8(1837)年没)

は臨濟宗妙心寺派の禅僧で、寛政元年(1789)から文化8年(1811)の間、日本最古の禅寺である博多・聖福寺第123世住持を務め、天保8年に88歳で没した。仙厓はその生涯で多くの絵画を遺し、禅の境地を分かり易く説き示す軽妙洒脱でユーモ

博多の人々の「枅形門」やその奥の福岡城下町に対する心情を、仙厓は皮肉混じりにこの図に表現したのではなかろうか。

④『旧稀集』(福岡市博物館所蔵)

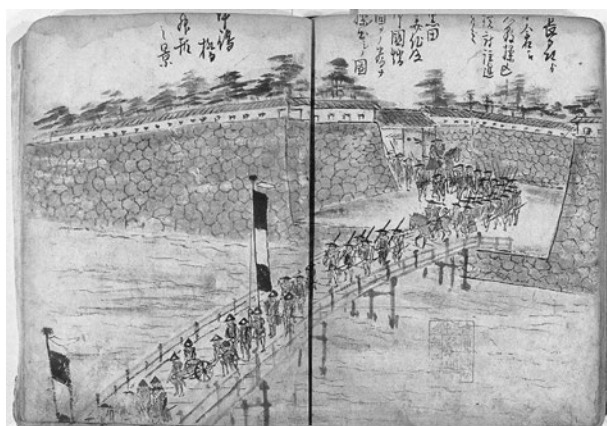


図17「西中嶋橋升形之景」(『旧稀集』、福岡市博物館所蔵)

『旧稀集』とは、博多中島町の商人庄林半助が明治時代に著したといわれる、江戸時代後期における福岡・博多の見聞集である。約200件の記事の中に40件の挿絵が描かれており、本図はその一つである。この「西中嶋橋升形之景」は幕末の慶応2(1866)年、第二次長州征討の折、福岡藩家老の黒田美作が長州より小倉へ敵軍勢が上陸したとの情報を得て国境警備のため出兵した時の様子を描いたものである。福岡城大手へ通じる「枅形門」南門から西中島橋を渡って行く福岡藩の兵士の隊列が描かれている。

⑤『福岡・博多鳥瞰図』(檜垣文庫・九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門所蔵)

本図は御笠川東上空から博多及び福岡の西方面を見通した鳥瞰図である。明治20(1887)年2月に発行され、福岡橋口町の林圓策が編輯兼出版人とある。後述するように、この絵が描かれた明治20年までに

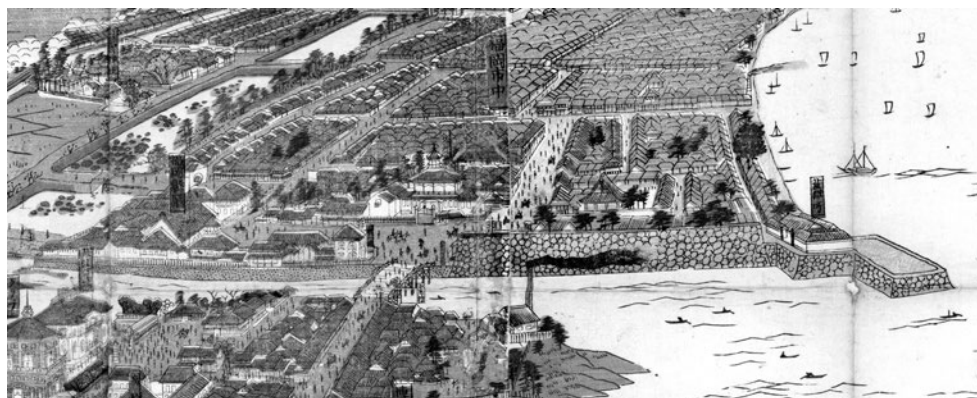


図18 「枅形門」周辺(檜垣文庫「福岡・博多鳥瞰図」部分、九州大学所蔵)

門南側の石壁は撤去されており、図のように門北側の石壁だけが残っている。図の左に見える建物が福岡県庁であり、現在はアクロス福岡・天神中央公園となっている。アクロス福岡の東側には石壁の一部が現存している。



図19 アクロス福岡東側に残る石壁の一部

ウ)古写真

①写真「枅形門」(福岡市博物館所蔵)



図20 写真「枅形門」(平成4年購入資料・写真類6、福岡市博物館所蔵)

明治初期に撮影された「枅形門」と西中島橋の写真である。高い石壁と漆喰の白壁、平門の北門等は上で見た諸史料を裏付ける。印象的なのは、高さ数十メートルはあろう松の木の存在感である。

(5)設置から撤去まで

「枅形門」設置の正確な年代は史料上特定できない。しかし、前掲の『岡本家文書』や『御入国砌諸土屋鋪割帳 福岡之御城取立之節』⁽¹⁸⁾の長政関連の史料にその記載が見えることから、長政が建設に関わっていたことは明らかである。おそらく福岡城築城の早い時期から存在していたと考えられる。

当初、設けられた門正面の櫓は、寛永期(1624～44)の福岡城の修築の際に撤去されている。前述のように、『正保図』には「矢蔵跡」と記されており、以後再び造られることはなかった。櫓を撤去した理由については不明である。

前述のとおり、「枅形門」は南北の二門を有していたため、修理・改築については両門同時に行われずに南北のそれぞれで順次実施された。『御要害作事箇所附』⁽¹⁹⁾には、まず北門が修理・改築され、その翌年～数年後に南門が修理・改築されたことが記録されている。

その後、明治維新に至って「枅形門」の形式的役割は終わったが、門及び石壁は依然として残されたままであった。黒田藩政期には防御施設としての役割を果たすことがなかった「枅形門」であるが、奇しくも明治6(1873)年に起こった筑前竹槍一揆でその役割を一度だけ発揮した。初代福岡市長を務めた山中^{たてき}立木(弘化2(1845)生-昭和6(1931)年没)の回顧録には、博多部にいた一揆勢が福岡部に侵入するのを「枅形門」が阻止したことが述べられている。

「党民は夫れより福岡に押寄せんと、中島橋を越んとせしより、橋頭の枅形門より野戦砲を引き出し、直ちに党民に向て打払はんとするものあれば、また暫く打など遮るものあり、目前に敵を控へて議論喧囂^{けんごう}を極めしが、折柄一群の乱民中嶋の裏手より川尻を渡り、須崎より福岡へ乱入せんとせし(中略)博多へ充満せし数万の東郡党民は中島橋より福岡に入込むこと能わず、方向を変して小鳥屋橋又は水車橋等より^{ちんにゆう}闖入し、春吉橋を越へ、福岡の裏手より進んで下之橋に至り、先導の数輩榊形の石塁を乗り越へ、内より鎖せる城門を開きしより、一同どつと城内に馳せ入り、県庁へ乱入して諸器具を破壊し、官舎へ放火したのであります。」⁽²⁰⁾

明治8(1875)年、旧福岡城三ノ丸に置かれていた福岡県庁が天神町に移転新築されることとなり、それに伴い「枅形門」南側石壁が撤去された。取り除かれた石は県庁建築の用材に利用された。しかしその後も、前掲の鳥瞰図にも描かれたように、門の北側

の石壁は残存していた。

市制施行以前の同20(1887)年、山中立木福岡区長は2252円33銭9厘の石塁取毀及石波戸築造費の予算案を福岡区会に計上した。山中は予算の提案理由として、

「(那珂川)河口より西中島橋に到る右側河岸に築きある石塁たる、昔時封建時代、割拠政略の外寇防禦の具備には最も必要なりしも、今日は^{ただ}蓄に不必要の具に属したるのみならず、運輸に商業に風致に一として其利益あるを見ざれば、寧ろ^{もし}毀却し其の材料を以て他の必要の需に供せざるべけんや」⁽²¹⁾

と述べ、撤去した石で新たに100間余りの波戸を築造し、石塁跡には一条の新道を開く計画を提示した。この予算案は全会一致で可決され、ついに最後まで残っていた「枅形門」以北の石壁は全て取り除かれたのであった。280年余りの「枅形門」の歴史はここに幕を閉じたのである。

4 文献に見る「枅形門」

前掲の文献史料以外に「枅形門」が登場するものとして『博多津要録』⁽²²⁾がある。37年間博多年行司を務めた原田安信(生没年不詳)の著によるものであり、江戸中期(17世紀中頃～18世紀中頃)の博多に関する様々な事項が記録されている。その『博多津要録』巻五に以下の二つの記述を見ることができる。

④ 柳町先年之由来之儀、御尋御座候ニ付委
ク書付指上ケ申候
元禄三年庚午歳五月廿日

貝原久兵衛殿博多旧記御改之時分、柳町之此

通之書付指出シニ付、則写置、

聞伝申覚之事

(中略)

一 ます方大石かきニ御植被成松、遊女共うへ
申事、

(後略)

前掲の絵画や古写真にも「枅形門」周辺は松の木がたくさん繁っている様子が描かれている。『博多津

要録』にあるこの記述では、これらの松は柳町の遊女たちが植えたのだとしている。その真偽の程は分からないが、もしこれが事実であれば、なぜ遊女たちは松を植えたのだろうかという疑問が湧いてくる。

次に、幕府の役人が博多に訪れた際に案内した博多町人との間で行われたやり取りの一部である。

⑨ 西与市左衛門殿御通路ニ付御尋書之
元禄五壬申歳四月五日

西与市左衛門様御尋被成候口上之覚

(中略)

(中略)

一 中嶋町東ノ橋ノ上ニて御意被成候ハ、此石
かきノかまへ、城かまへニて有之候哉と御尋
被成候、城かまへニてハ無御座候、是ハ福岡
之かまへにて御座候由申上候事、

一 中嶋町ニて御尋被成候ハ、是より福岡ニて
有候哉と御尋被成候、我々申上候ハ、先へ見
へ申候橋ハふく岡之かまへと申上候事、

(後略)

幕府勘定方に属する役人、西与一左衛門(市左衛門)が博多の町を案内された。博多と中島町(現、中洲)を結ぶ東中島橋では、役人は橋上から中洲の向こう岸を見て、「あの石垣の構えが福岡城の構えか」と尋ねている。役人が目にした石垣とは「枅形門」の石壁と思われる。博多の年行司は、「あれは城の構えではなく福岡城下の構えである」と答えている。さらに中洲に入ると、またも役人より、「ここから福岡か」と聞かれ、年行司は、「先に見える西中島橋より福岡城下の構えである」と答えている。このやり取りは、藩外の人間が見た「枅形門」やそれに続く高い石壁がとても不可解なものに映ったということを示している。

5 他城郭の事例

福岡城「枅形門」のような城門は他の城郭にも存在していたのだろうか。福岡藩に隣接する外様の大藩、細川藩の小倉城と鍋島藩の佐賀城の例を見てみたい。

(1)小倉城

豊前國小倉城は永禄12(1569)年に毛利元就が築城を開始した後、高橋鑑種あきたね、さらに豊臣政権下では毛利(森)勝信の居城となった。関ヶ原の戦いの後、丹後宮津城主細川忠興が中津城主として豊前に入り、慶長7(1602)年、忠興は中津城から小倉城へ移った。これを機に小倉城の大改修が始められ、同12(1607)年に完成をみた。城郭の形式は輪郭式平城であり、典型的な「織豊系城郭」の一つである。輪郭式とは、本丸の外側を二ノ丸、その外を三ノ丸(曲輪の名称が城により異なる)が回の字のように順に囲んでいる形式であり、平城とは、平地に建てられた城をいう。

図21は幕末の安政頃(1854～60)の『小倉藩士屋敷絵図』⁽²³⁾である。この時代には焼失しているはずの天守も描かれている。細川氏以前の城下町は図中央の紫川から西の板櫃川の間(西曲輪)であったが、細

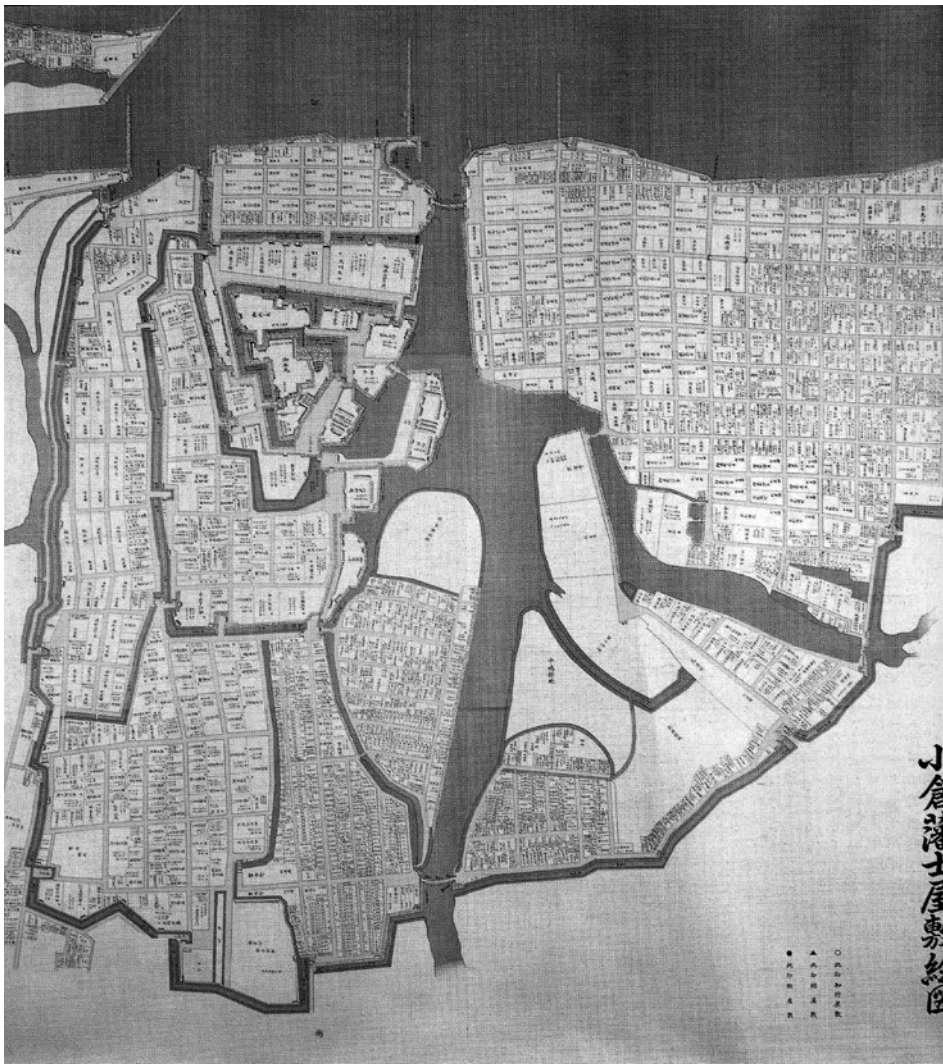


図21 小倉城下町(『小倉藩士屋敷絵図』、北九州市教育委員会所蔵)

川氏時代にこの西曲輪に加えて人工の砂津川を開削し新しい町(東曲輪)をつくった。城郭のある西曲輪には直臣を居住させ、東曲輪にはおもに陪臣と町人を混住させた。郭外との通路口としては、西曲輪側に溜池口・篠崎口・到津口・蟹喰口が、東曲輪側に門司口・中津口・香春口の各門がつくられた。

細川氏の築城した小倉城は建設当時、同氏と隣接の大名との緊張関係を反映した構えとなっている。東隣の毛利氏(長州藩)は関ヶ原の戦いで西軍の大將を務めていたため、東軍に属していた細川氏とは敵対関係にあり、一方、西隣の黒田氏(福岡藩)とは関ヶ原では同じ東軍同士であったが、その直後に起こった先納年貢米の未返還事件をきっかけに両者の関係は急速に悪化していた。そのため、細川氏は特に堅固な堀や城門を建設する必要があったのである。小倉城には大小あわせて48カ所の門があったとされる

が、現在は門の跡が数カ所確認できる程度で、門自体は全く残っていない。城下から郭外に通ずる街道には、それぞれ嚴重な門を構えており、それらの門は全て枳形虎口の形態がとられていた。さらに、ほとんどの門には寺院などの防御施設が配されていた。寺院は墓石が弾丸除けになったり、その境内が非常時には軍事基地として利用するため、多くの城郭で門や堀のそばに置かれていた。また、平時における門の警備についても万全な態勢が整えられていた。特に門司口門と到津口門については、他の門より多い20名の門番が配置されていた。門司口は門司(大里)往還、到津口は長崎街道の出入口であっ

たため、それぞれ長州藩と福岡藩に対する備えを意識して、特別な警戒態勢が取られていたようである。このように、小倉城では城門の数や警備等は福岡城を上回る態勢が取られていた。しかしながら、福岡城「枳形門」のように、特定の門のみの規模や形式を変えたりはしていない。また、武家地はもちろんのこと、城下の東曲輪の町人地も含め堀や門で防御しており、城下町を分断するような門は存在しなかった。

(2) 佐賀城

佐賀城は天正年間に龍造寺氏が建てた村中城を拡張したもので、慶長13(1608)年から佐賀藩祖鍋島直茂が大普請を開始し、同16(1611)年に完成した輪郭梯郭複合式の平城である。佐賀城は、防衛と機密保持の二つの理由から別名「沈み城」とも呼ばれた。この城は低平地に、堀を掘削して泥土を掻き揚げ、盛り上げただけの微高地に築かれたため、周辺の十間堀川などの河川を堰き止めれば城下はたちまち水浸しとなるように設計されていた。また、城下町北部を横断する長崎街道は、城下に入れば入るほど城の位置から遠ざかっていくようになっていたため、街道沿いから城は見るができなかった。さらに内郭の周辺の土塁上には松や楠が植えられ、城がそれらの木々の中に沈み込んで見えたことが「沈み城」と呼ばれた所以である。

その他、佐賀城の構造上の特徴としては、「四十間堀」(40間=約72メートル)と通称されていたように、内郭の周囲の堀(内堀)の幅が広いことがあげられる。また、福岡藩の加勢も受けて内郭北側の堀(通称「筑前堀」)を掘り上げる等、防御の要となる堀の建設には心血を注いだようである。

佐賀城築城当初、鍋島直茂・勝茂父子はこの城を大規模なものにしようと計画していたようである。慶長年間に作製された『慶長御積絵図』⁽²⁴⁾にその構想を見ることができる。ところが、城の防衛上不可欠な門・石垣・櫓については、計画どおり建設が進まなかった。まず門については、計画段階では内郭に通じる北門・南門・西門・裏門の4つの門は枳形

虎口を有するものであった。しかし、実際に枳形が用いられたのは西門のみであり、他の門は平入りとなり枳形門とはならなかった。なぜ西門だけが枳形門になったのか、その理由は不明である。石垣に関しては、本丸・二ノ丸を全てと三ノ丸・西ノ丸の一部に築く計画であったが、それも本丸の一部のみにとどまり他は土塁で護岸された。櫓についても、城内の隅部を中心に五棟の多層櫓を設ける計画が、結局は三ノ丸の隅に一棟しか築かれなかった。このように、計画を大幅に変更した理由は、幕府に対する相次ぐお手伝い普請が重なり財政難に陥ったため、当初の計画を断念せざるを得なかったと考えられる。

佐賀城下町に関しては、天正19(1591)年から領内の町人を誘致して建設が始められた。その後、慶長13(1608)年の佐賀城大普請に合わせて本格的な町割りが行われ、33の町がつくられた。これらの町では下級武士と町人が共に生活し、同じ職業に従事していたという。前述のように、城下には長崎街道が通り多くの人や物資が往来していた。



図22 佐賀城西門付近(右奥が西門跡)

図23は『寛永御城并小路町図』⁽²⁵⁾といい、寛永3(1626)年に作製された。東の高尾橋から西の扇町橋(高橋)まで城下の広範囲を収めており、佐賀城下や周辺部の構造を知ることができる。本図には堀や川、土塁や石垣についてその長さや深さ等、城下の軍事施設について詳細に記されている。ところが、門についての記載は一切見られない。オランダ商館付の医者として元禄3(1690)年来日したドイツ人ケンベルは『江戸参府旅行日記』で、佐賀城下町について「城門には大勢の番兵がいるが、いずれも防備のた

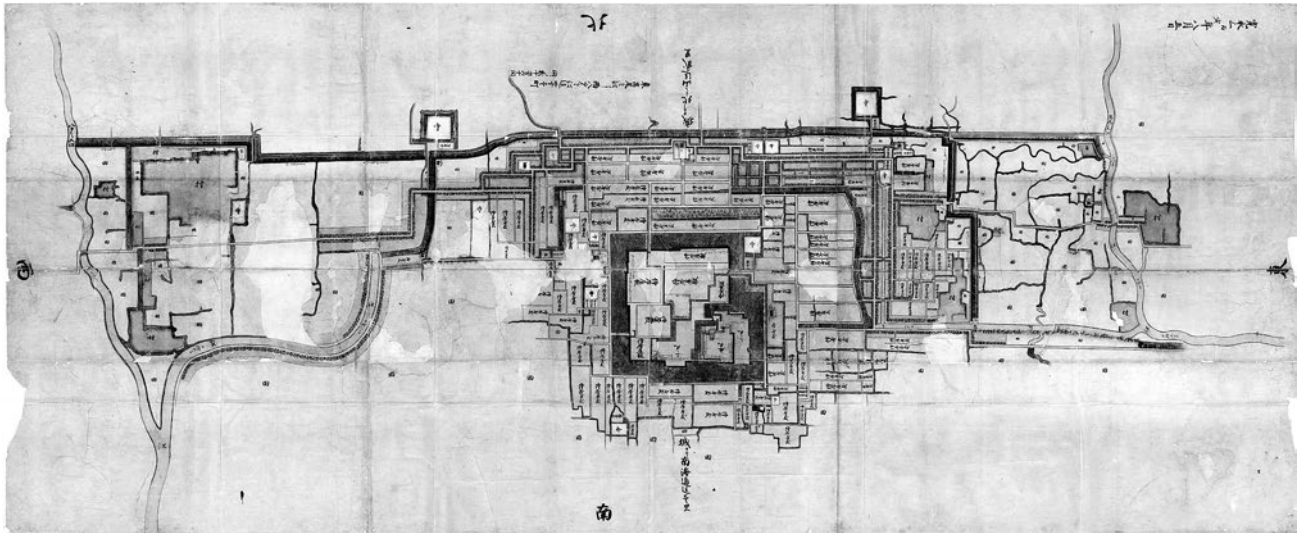


図23 佐賀城下町(『寛永御城并小路町図』、鍋島報效会所蔵)

めというよりは、むしろ飾りのためである」⁽²⁶⁾と記録している。このように、防御施設としての佐賀城下の城門の存在価値は低く、また門の警備も17世紀まではそれほど厳しいものではなかったようである。やがて18世紀後半になり、城下の防犯・治安対策として長崎街道やその他城下の道路に新たに15か所の木戸や番所が設けられた。しかしながら、佐賀城下では福岡城「枅形門」のような嚴重な門がつけられることは最後までなかったのである。

6 「枅形門」設置の理由

では、なぜ黒田氏は「枅形門」をつくったのか。その理由を以下の3つの側面から考えてみたい。

(1) 象徴的目的

「枅形門」を福岡城のシンボルとして位置づけ、福岡城の表玄関に相応しい風格を持たせたかったとする説である。一般的に、城郭の象徴といえば天守閣である。従来、福岡城には天守閣は建てられなかったとされてきたが、現在は、築城当時に天守閣が築かれものの、後に破却されたという説が有力になっている。長政は内郭のシンボルタワーとしての天守閣とともに、福岡城下町の表玄関にあたる那珂川東取入に、太守の居城のもう一つの象徴として「枅形門」を設けたのではなかろうか。

(2) 軍事的目的

防衛目的、すなわち、福岡城東側より侵入する敵軍勢に備えるため、あるいは博多湾に侵入した敵船が那珂川下流から上陸するのを防ぐためである。長政は博多湾からの襲撃に備えるため、慶長年間に福岡城下町の北側の海岸沿いに22の寺院を配置していた。寺院を防御施設として利用したのである。そのため、海上より侵入した敵軍勢が上陸するためには那珂川河口方面に回り込まなければならない。その際に「枅形門」が防衛の最前線となるため、他の門よりも一層嚴重につくられたのではないだろうか。

(3) 政治的目的

博多商人を牽制し、管理統制する目的から門を設置したとする説である。黒田氏の入部以前の博多商人は、神屋宗湛や島井宗室を双壁とする豪商たちが豊臣政権の後ろ盾を得て、莫大な財力と権勢を保持していた。慶長3(1598)年に秀吉が亡くなり、2度目の朝鮮出兵も失敗に終わると、博多商人たちの全盛期も終焉を迎えることとなった。ところが、関ヶ原の戦い後に黒田氏が新領主となってからも、彼らは富や名門意識を持ち続け、黒田氏に対しては同輩意識さえ持っている、黒田氏にとって目の上のたんこぶであった。そのような博多商人たちを押さえ込むために、黒田氏が仕掛けた装置の一つとして「枅形門」がつけられたというわけである。

この政治的目的について、木島孝之氏は次のように述べている。「東取入の高石垣と両袖枳形虎口は、博多町衆と黒田氏の微妙な緊張関係を投影した装置であった。これにより博多は、領主の膝元である福岡との間に隔絶性(独自性)を持つ空間として区別される一方、防衛的・身分的序列の面では、その経済面での優位性に反して福岡の下位の空間に位置づけられた。」⁽²⁷⁾さらに、「東取入の高石垣は、柵内の「問題分子」(博多町衆)を眼下に収め牽制する監視塔に相当する装置であった」⁽²⁸⁾と論じている。

(4) 結論

福岡城は前述のように関ヶ原の戦いの直後から築城が始められたが、まだ時代は戦乱が一時的に休止しただけに過ぎなかった。実際に、慶長20(1615)年の大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡するまでは、再び乱世に逆戻りする可能性すらあったのである。天下分け目の戦いに勝利した東軍側の諸将が論功行賞で取立てられる一方、敗北した西軍側の大名には改易や減封の処分が下され、大量の牢人が発生することとなった。不満分子がくすぶっている中で、諸大名やその家臣たちはいつ起こるか知れない争乱に常に備えておかなければならなかった。そのような背景の中で築かれたのが福岡城であり、「枳形門」である。長政や父如水はあらゆる可能性を想定した上で、城地の選定や縄張を行い、その結果福岡城の完成をみたのである。

ところが博多に関しては、黒田氏に重大な誤算があった。博多商人を福岡城下町へ移住させることが予想以上に困難となり、長政が精魂込めて建設した福岡城下町の発展が危ぶまれたからである。このような状況の中で、様々な観点から考慮した諸々の目論見を複合的に組み立てた結果、「枳形門」は厳めしい姿となってしまったのではないだろうか。

政治的目的で考慮しなければならないのが、福岡城築城にあたって、黒田氏は博多の豪商たちから莫大な資金提供を受けたという事実である。それがなければ堅固で雄大な福岡城を築くことはできなかったのである。もちろん黒田氏が博多の支配者であっ

たとはいえ、わざわざ資金提供者の不興を買うような施設をつくらなければならないほど、博多商人に強い態度で望まなければ黒田氏の領国経営は成り立たなかつたのであろうか。

結論を出すに必要な史料が乏しいためこれ以上の言及を止めざるを得ないが、「枳形門」はその建設当時の時代背景に基づき、必要に迫られてつくられた建造物であることだけは間違いない。

7 おわりに

今回、これまでの先行研究を手がかりに諸史料の検証や他城郭との比較等を進めていったが、過剰に堅固で壮大な「枳形門」をつくった黒田長政の真の狙いに辿り着くことはできなかった。しかし、門の存在が設置以来二百数十年にもわたって福岡・博多の人々の意識に影響するものとなったことは紛れもない事実である。

明治20(1887)年の「枳形門」石壁の完全撤去について、後に初代福岡市長を務めることになる山中立木は回想録で、

「従来弊習として福岡人士と博多人士は自然相容れざるが如き感情あるも、是亦其中間に峙つ石塁を除かば人気自ら疎通するの一助たらん」⁽²⁹⁾と述べ、残存していた石塁を全て撤去したことは、「福博を見通し自ら感情融和するの一端とはなりたのであります」⁽³⁰⁾とその真情を吐露している。

ところが、門の完全撤去で福岡・博多の人々の相容れざる感情が直ちに融和することはなかった。

福岡・博多両住民は明治22(1889)年の福岡区の市制移行にあたり、名称を「福岡市」にするか「博多市」にするかで激しく対立した。結局、市名は県の告示で「福岡市」と決定し、市名問題は一応の終止符が打たれた。

ところが、市制施行後すぐにこの問題が再燃した。明治23(1890)年に開かれた第二回市会で博多部選出議員から突如、「市名を博多市と改称したい」という提案がなされたのである。市内は、この提案に賛否

両論が沸き立ち、騒然となった。また、地元の二大新聞の論調も真二つに割れた。福陵新報は、「市発足の当初から博多市とすべきであったし、改称は当然である」と改称論を掲げる一方で、福岡日日新聞は、「市名は博多市でも福岡市でもよいが、市名変更問題に血道をあげて、自治体の和を乱してはならぬ」と慎重論を掲げた。当時の会議場であった東中洲の共進館の傍聴席には、市名変更の提案に激昂した福岡部の住民が殺到し、審議状況を監視する異様な状況であったという。

当時の市会の構成員は30名で、その内訳は博多部選出議員が17名、福岡部選出議員が13名であったため、博多部選出議員が一致団結すれば、改称論が多数を制することが見込まれた。ところが採決では、議長を除く出席議員26名のうち、それぞれ13名の可否同数となったため、当時の規定並びに慣例に従い、再審議となった。再審議の途中、一部議員から「議長の意見も聞きたい」旨の発言があり、不破国雄議長は議長代理者(副議長に相当)と交替した。不破議長は自席に着席し、「提案には不同意」との意見を述べ、再審議の採決に参加した。不破議長は福岡部選出の旧士族であった。そして、再審議の採決の結果、再び賛成13名の可否同数となったため、議長代理者は、「市名はこのまま変更せざることに決す」と宣告し、改称の提案は否決されたのであった。⁽³¹⁾

市名改称が成らなかった博多の人々は、同年に開業した九州鉄道の駅名が「博多駅」となったことでわずかに慰められたというが、市名問題はその後も度々再燃したのであった。

この出来事が示しているように、長年福岡・博多を分けた「柝形門」の心理的影響は極めて甚大だったのである。

しかし現代に至り、福岡・博多の融和が具現化されるに至っている。博多の伝統的祭りが福岡市民の祭りに様変わりしたことがその代表例である。

現在の「博多どんたく」に繋がる博多松囃子は、もとは小正月に新年を祝う民俗行事であり、治承3(1179)年に没した平重盛を追悼するために始まったとされている。⁽³²⁾江戸時代に入り、博多の町人た

ちが松囃子を仕立てて福岡城の藩主を表敬訪問する、正月の年賀行事として定着した。明治以降、何度か中止を余儀なくされたものの、第二次大戦後に至り、福岡市や商工会議所、市民の有志の手によって「博多どんたく」として、5月の連休中に行われるようになったのである。このように、博多町人の祭りが福岡市民の祭りとなった「どんたく」は、現在メイン会場であるどんたく広場(明治通り、天神一呉服町間)を始め、福岡・博多の各地で盛大に行われている。

また、同じく博多の伝統的祭りである「博多祇園山笠」も、現在では博多だけでなく、福岡部にまで乗り入れている。「博多祇園山笠」の起源については諸説ある。⁽³³⁾鎌倉時代の仁治2(1241)年、博多で疫病が流行した際に、承天寺の聖一国師が疫病除去のために木製の施餓鬼棚に乗って祈祷水を撒いて廻ったのが始まりとされている。この祭りは博多総鎮守である櫛田神社に奉納する伝統行事であり、神社の氏子である博多町人等によって受け継がれてきた。山笠の方も第二次大戦後に大きく変貌することとなった。昭和37(1962)年に福岡市の要請で「集団山見せ」が行われることとなった。これによって、商人の町博多で生まれた山笠が、初めて城下町福岡に昇き入れられることになったのである。さらに、平成26(2014)年に黒田家16代当主が「集団山見せ」で台上がりを務めたことは、福岡・博多の歴史上、画期的な出来事であった。

江戸時代には「両市中」と呼ばれ、歴史も性質も全く異なった双子都市福岡と博多は、明治になり福岡市として共に歩む存在へと生まれ変わった。その福岡市のもとでも困難はあったものの、21世紀の現在に至って福岡と博多はようやく互いの個性を認め合い、それぞれの特質を生かし協力し合う関係へ成長するまでになった。今後はこれまでの両者の歴史を前提としつつ、九州の中核都市並びに大陸との交流拠点として、より魅力的で活気溢れる「FUKUOKA」になることを期待したい。

結びにあたり、本稿の執筆に際して大変親身に御指導頂きました西南学院大学国際文化学部教授の宮

崎克則先生に深謝申し上げます。また、多くのご指摘を下さいました福岡アーカイブ研究会の皆様と資

料提供やご助言を頂きました福岡市博物館の高山英朗氏・八嶋義之氏にお礼申し上げます。

注

- (1) 『織豊系城郭』とは、織田信長に始まって豊臣秀吉、更には彼らの配下にあったいわゆる織豊系大名によって完成された城郭群の総称である。その特徴として、瓦・高石垣・礎石建物を持つとしている。
- (2) 慶長14(1609)年検知高による。
- (3) 貝原益軒『黒田家譜』巻之14・慶長6年(川添昭二・福岡古文書を読む会編『新訂黒田家譜』1、文献出版、1983年)
- (4) 『黒田家文書』2(福岡市博物館、2002年)
- (5) 貝原益軒『黒田家譜』巻之14・慶長6年(川添昭二・福岡古文書を読む会編『新訂黒田家譜』1、文献出版、1983年)
- (6) 小和田哲男『戦国城下町の研究』(清文堂、2003年)
- (7) 西ヶ谷恭弘『城郭』(東京堂出版、1993年)
- (8) 丸山雅成『九州の近世城郭と福岡城』(『海路』第4号、海鳥社、2007年)
- (9) 西田博『福岡城の歴史と構造』(『西南地域史研究』10、文献出版、1995年)
- (10) (11) 貝原益軒『筑前国続風土記』巻之3・福岡城(伊東尾四郎編『筑前国続風土記』、文献出版、2001年)
- (12) 小林茂『黒田氏五十二万石「岡市中」繁栄の城下町』(『熊本・九州の城下町』、平凡社、1998年)
- (13) 伊津見孝明『福岡城の御門法に関する考察』(2011年5月22日に福岡市博物館で行われた『新修福岡市史—特別編 福岡城』の編集会議の研究會にて報告)によれば、『御要害御門法』(『伊丹家資料』449、福岡市総合図書館所蔵)、『御要害作事箇所附』(『桧垣文庫』5-6、九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門所蔵)及び『文化五年壬午 興雲公二百年忌御本九御神祭御宮節』(『桧垣文庫』134-12、九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門所蔵)から抽出の結果、37の門を確認した。
- (14) 『菊池家文書』44『覚』(菊池裕氏所蔵)
- (15) 西田博『福岡城の堀幅と枳形門について』(『西南地域史研究』8、文献出版、1994年)
- (16) 『岡本家文書』278 黒田長政判物写(西日本文化協会『福岡県史 近世史料編 福岡藩初期 上』、福岡県、1982年)
- (17) 『吉田家文書』528『福岡城下絵図』(九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門所蔵)
- (18) 福岡県立図書館複写本 K288//ゴ(福岡県立図書館郷土資料室所蔵)
- (19) 『桧垣文庫』5-6(九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門所蔵)
- (20) 山中立木『旧福岡藩事蹟談話会筆録』(『筑紫史談』第37集、大正15年5月15日発行・復刻版、福岡県文化財資料集刊行会、1974年)なお、筆者により旧字は一部新字に置換した
- (21) 『福岡区会議事録』(福岡市総合図書館所蔵)
- (22) 原田安信『博多津要録』(秀村選三編『博多津要録』1、西日本文化協会、1975年)

- (23) 『小倉藩土屋敷絵図』(北九州市教育委員会所蔵)
- (24) 『慶長御積絵図』(江戸後期書写、原図は慶長年間、鍋島報効会所蔵)
- (25) 『寛永御城并小路町図』(鍋島報効会所蔵)
- (26) ケンペル『江戸参府旅行日記』(斎藤信訳、東洋文庫303、平凡社、1977年)
- (27) (28) 木島孝之『都市の成り立ちと歴史的文脈：近世都市—福岡(福岡・博多)を題材にして』(『都市計画』57(1)、2008年)
- (29) (30) 山中立木『旧福岡藩事蹟談話会筆録』(『筑紫史談』第37集 昭和2年12月25日発行・復刻版、福岡県文化財資料集刊行会、1974年)
- (31) 『福岡市議会史 第1巻 明治編』(福岡市議会、1971年)
- (32) 起源については諸説あり、確かな起源は定かではない。『宗湛日記』には、文禄4(1595)年10月、筑前領主小早川秀秋の居城であった名島城へ博多町人が正月のように松囃子を仕立てて表敬訪問したことが記されている。
- (33) 櫛田神社の祭神の一つ祇園大神(素盞鳴尊)を勧請した天慶4(941)年説。すでに都(京都)では現在の祇園祭につながる御霊会が行われており、勧請間もなく始まったという説。また、文献的初見である「九州軍記」に基づいて永享4(1432)年起源説もある。本文の仁治2(1241)年説は博多祇園山笠振興会が取っている説である。

参考文献

- ・ 福岡市史編集委員会『新修福岡市史—特別編 福岡城』(福岡市、2013年)
- ・ 朝日新聞福岡本部『はかた学7 福岡城物語』(葦書房、1996年)
- ・ 宮崎克則・福岡アーカイブ研究会『古地図の中の福岡・博多』(海鳥社、2005年)
- ・ 『福岡県史 通史編 福岡藩(一)』(福岡県、1998年)
- ・ 『熊本・九州の城下町』(平凡社、1998年)
- ・ 西田博『福岡城の堀幅と枳形門について』(『西南地域史研究』8、文献出版、1994年)
- ・ 木島孝之『城郭の縄張り構造と大名権力』(九州大学出版会、2001年)
- ・ 小林茂・佐伯弘次『近世の福岡・博多市街絵図—公用図について—』(『福岡平野の古環境と遺跡立地—環境としての遺跡との共存のために—』、九州大学出版会、1998年)
- ・ 『福岡市史 第1巻 明治編』(福岡市、1959年)
- ・ 『北九州市史 近世』(北九州市、1990年)
- ・ 長崎街道小倉城下町の会編『城下町小倉の歴史』(長崎街道小倉城下町の会、2006年)
- ・ 『佐賀市史 第2巻』(佐賀市、1977年)
- ・ 『御城下絵図に見る佐賀のまち』(鍋島報効会、2009年)
- ・ 『鍋島直茂・勝茂の時代』(鍋島報効会、2011年)
- ・ 井上精三『どんたく・山笠・放生会』(葦書房、1984年)
- ・ 福岡市博物館ホームページ(<http://museum.city.fukuoka.jp/>)